「はてなの茶碗」余話

「土曜寸言」　03.10.11

古典落語の名作「茶金（ちゃきん）」は、初代橘家円喬（たちばなやえんきょう）の得意芸だったものを、弟子の五代目古今亭志ん生に継承され、現代に伝わったものである。

「茶金」こと京都木屋町の古美術鑑定家茶屋金兵衛はその道の達人で、彼が街の骨董屋の店先で焼き物などの一つを手に取ろうものなら、それだけで十両の値が付く。まして、「はてな？」と首でも傾げようものなら一回当たり百両の値が付くというほどだった。

ある日、金兵衛は清水寺参詣の帰り道、音羽の滝の水茶屋で休んでいた。出された安物の茶碗からはポタポタと茶が洩れる。もとより清水焼の数茶碗、新品で六文、茶渋のついた古茶碗となった今何の値打ちも無い。ただ、漏れる訳が分からないので、陽に透かしたり、手でこねたりしながら、首を傾げかしげ眺めていた。手に触れただけで十両なのだ。これは破格の値になる。これを物陰から見ていたおじみの登場人物達が欲の皮を突っ張らせて一攫千金を目論む。だが、もとより出来損ないの数茶碗のこと、計略は見事に失敗。彼らは、「古くなって値打ちが出るのは、もともと値打ちのあったものだ。もとから悪いものが古くなったら一文の値打ちも無い」とたしなめられる。

洩れる原因を探すために茶屋金兵衛は、この茶碗を手許に置き、ためつすがめつ眺めるがどうしても分からない。興にまかせて、「清水の音羽の滝に落としてや茶碗もしびに森の下露」と腰折れを詠んだ。

さて、金兵衛が、近衛殿下のお茶席に招かれたときこの話をしたところ、殿下もぜひその茶碗を見たいという。お見せすると、殿下は、「音なくて滴り落ちる清水焼はてなの高き茶碗なりけり」と色紙に書いた。

更にこの話を、近衛殿下が天皇に話すと、「朕もぜひ見たい」と言われる。そこで、この水漏れ茶碗をお見せする。すると、天皇は「漏り出でし岩間の清水流れきて世に伝わりてはてなかるらむ」と水茎の跡も麗しく、短冊にお書きになった。

この短冊を拝領した金兵衛、この数茶碗を桐の箱に入れ、銘を「はてなの茶碗」として古美術市に出品した。近衛公の色紙に天皇の短冊、茶金の箱書きで粉飾された原価六文の数茶碗は、みるみる値がせり上がって、ついに千両で買われていった。

さて、いまの世を見回してみる。政界、官界、学界、財界等々、世の指導者層に、筆者も含めてだが、「はてな」の人物の何と多いことであろうか。箱書きや色紙、短冊などをむやみにありがたがるのは如何なものであろう。選挙が近い、鑑定力を高めよう。